業務完了報告書

令和５年度市自委第７号静岡市協働パイロット事業
「若手先生がもう一歩進める！「いつもの保育に自然体験を」研修」業務

受託者　特定非営利活動法人しずおか環境教育研究会

目次

1　委託業務の名称　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P3
2　委託業務の目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P3
3　受託者　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P3
4　業務の内容
（1）環境教育の実践による人材育成　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P3～24
実施場所・園の選定理由・実施方法・モデルプログラム全体の構成・P3～4
【モデルプログラムの実施】
（ア）　上土こども園　・・・・・・・・・・・・・P5～7
（イ）　中村町こども園　・・・・・・・・・・・・P8～10
（ウ）　横砂こども園　・・・・・・・・・・・・・P11～14

【受講者アンケート】
●保育教諭のアンケート内容と結果　・・・・・・・P15～20
●環境学習指導員のアンケート内容と結果　・・・P20～23
●アンケート結果の分析　・・・・・・・・・・・・P23～24

（2）こども園園長会での普及啓発　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P24

5　役割分担　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P24

業務完了報告書

1　委託業務の名称

令和５年度市自委第７号静岡市協働パイロット事業

「若手先生がもう一歩進める！「いつもの保育に自然体験を」研修」業務

2　委託業務の目的

市内幼稚園・保育園・こども園等に対し環境教育の実践による人材育成と動画発信を実施し、幼児教育現場で自然体験教育スキルを向上させることを目的とする。

3　受託者　特定非営利活動法人しずおか環境教育研究会（エコエデュ）

4　業務の内容

当該業務における事業担当課である、静岡市環境局環境共生課、静岡市子ども未来局こども園課と連携して行った。

（１）　環境教育の実践による人材育成

【実施場所】以下の３園でモデルプログラムを実施した。

(ア) 静岡市立上土こども園

(イ) 静岡市立中村町こども園

(ウ) 静岡市立横砂こども園

【園の選定理由】

・モデルとなるような園庭や日常的に利用している公園がある。

・育成したい若手保育教諭がいる。

・撮影するにあたり、園児の人数が適当である。

・園長に自然遊びを通じた保育を推進していく意欲がある。

・実施園以外の園からの見学者が参加しやすいよう、葵区・駿河区・清水区それぞれ１園ずつになるように配慮した。

・多様な環境での自然遊びのヒントにつながるよう、園庭や公園の特徴から異なるフィールド設定になるよう考慮した。

以上を踏まえて各園でのテーマを絞り、市と協議して決定した。

【実施方法】

実施 NPO スタッフが園または近隣の公園に出向き、担当教諭に活動のねらいやアプローチ方法を伝えた上で、園児と自然遊びを展開した。その様子を希望する他園保育教諭や静岡市環境学習指導員が見学し、幼児に対する活動の設定の仕方や働きかけなどを学んだ。プログラム終了後に振り返りを行い、プログラムの意図明かしや質疑応答の中で、普段の保育に活かすためのヒントを持ち帰った。また、実施前後にアンケートをとり、参加前の自然遊びに対する意識と参加後の意識の違いについて分析した。

【モデルプログラム全体の構成】

全体テーマ：『自然遊びで子どもの創造性を育てよう！』

～先生の園庭・公園を見る目が変わる！～

研修のねらい（3 園共通）

・子どもたちも先生もこれまで気づかなかった園庭や公園の自然に目を向け、五感を使って発見や遊びを生み出すようになる。

・先生たちの園庭や公園を見る目が変わったり、アプローチ方法がわかったりすることで、これまでよりも自然遊びを普段の保育に取り入れるようになる。

実施園	上土こども園 （葵区）	中村町こども園 （駿河区）	横砂こども園 （清水区）
テーマ	『いまある園庭を活かそう！これからの園庭活用を考えよう！』	『街中の公園の隠れた素材を見つけ出そう！』	『自然豊かな公園で子どもの好奇心を耕そう！』
日時	10/17（火） 9:00～11:30	10/19 （木） 9:15～12:00	11/22（水） 9:10～11:45
延期日	10/20（金）	11/8（水）	11/30（木）
対象	年中児　17 名	年中児　28 名	年少・年中・年長児 18 名
場所	園庭	中原桔梗公園	清見潟公園

※自然あそびは 1 時間程度の実施。

※前後にオリエンテーションと事後振り返り（意図明かしや質疑応答など）を実施。

※回ごとに、他園の保育教諭・静岡市環境学習指導員を募集。

【モデルプログラムの実施】

①上土こども園

●実施日時：2023 年 10 月 17 日（火）9:15～11:30

●対象園/対象児：上土こども園　年中きりん組　17 名

担任 2 名、副園長　　計 20 名

●受講者：保育教諭 5 名、環境学習指導員 1 名

●対応スタッフ：受託 NPO　杉山順子・柴崎千賀子

●実施フィールド：園庭

●今回のテーマ:『いまある園庭を活かそう！これからの園庭活用を考えよう！』

●プログラムの流れ：

9:00　【受講者】受付開始@玄関⇒部屋へ

9:15　【受講者】研修のオリエンテーション（室内）

9:25　【受講者】園庭へ移動

9:30　【園児】園庭に出ている（年中組のみが園庭にいる）

スタート　進行【柴崎】芝生広場

・スタッフ自己紹介

・今日やること「お庭でピクニックをしよう！」

・お約束

・先生の関わり方

9:35　おいしいお弁当をつくってピクニックをしよう！

・色・形・中身・においなどを観察して、葉っぱや花などをおかずに見立てる。

・フウセンカズラの実や落ちている花、葉っぱ、砂でおにぎり

・お花の色水でジュース

・葉っぱや木の実でテントを飾りつけ

10:10　お弁当を見せ合おう！

10:15　お弁当を食べよう！（ジュースで乾杯）

10:20　ふりかえり

10:25　おしまい【園児】片付けをして室内へ（お弁当箱を持つ）

【受講者】休憩

10:45　【受講者】事後振り返り@室内

・実施者より

・質疑応答　など

11:20　【受講者】アンケート記入

11:30　終了・解散

●実施者より

＊担任

・園庭の草花は子どもたちにとって身近なものであるが、「こういうところに目を向ければいいのか」という発見の仕方や自然物の見方というものが子どもにとっても保育者によっても学びになった。

・普段、テントの下でおうちごっこをしている。今日をきっかけに「飾る」という遊びが出てくるのではないかと思う。色水遊びも自然物を使ったものにつながってくるはず。

・ドクダミの葉は、いつもは「臭い」と言っているが、今日は「いい匂い！」と言っていた。保育者の持っていき方で子どもの感覚が変わるのだと感じた。

・春にはカタバミの葉はハート型であることから「LOVE 遊び」が流行った。今日、「ドクダミの葉もハート」「フウセンカズラの種にもハート」と遊びがつながった。

＊受託 NPO スタッフ

・「においを嗅ぐ」を大げさにやってみせたところ、子どもたちからにおいの反応がよく返ってきた。

・子どもたちは「フウセンカズラは茶色になったら取る」ことを知っていた。今日はあえて、緑の状態のものを触ったり中を開いてみたりして、茶色のものとの違いに気づけたらおもしろいと思って、アプローチしてみた。

・園庭の草花は育てているものが多く、採っていいのかどうか迷うと思うが、花は取ることで次の花芽が出てくる。一つしかなかったら採らないとか、下に落ちているものを優先して取る、など、経験を積み重ねることで状況から自分で判断できるようになる。雑草プランターや自由に採ってもいいプランターを作るのもあり。園でのルールをつくる必要がある。

・また、園庭はきれいにしすぎると、遊びの素材を失うことになる。落ち葉や雑草は素晴らしい教材である。

●見学者より

＊保育教諭

・色を移す白い紙が最初から出さずに途中で出したのは敢えてなのか？

⇒子どもが興味を持った時に出せるように準備をしておく。今回は指についた花の汁に興味をもったため、紙を出した。出さない時もある。

・１つのものでも重ねたり太陽にかざしたり、いろいろな見方をすると発見がある。五感を使ったり見方を変えたりというところに広がりを感じた。

・0 才児ではどのようなアプローチの仕方があるか？

⇒ベビーカーに乗ったまま、抱っこしたままでもできる。保育者が興味を持ったものを採って匂いをかいで見せたり、服にくっつけてあげたり、手に持たせるだけでも、視点を見せることはできる。2才児とお弁当作りをやった時にも、お弁当作りはきっかけにすぎず、そこからたくさんの発見と遊びに発展するので、これをやらねばとならないほうがいい。

・子どもたちに「一緒に遊んでくれる？」と投げかけたことで、自分達が主体だという感覚をもって遊ぶことができていた。

＊指導員

・大きな声の指示がなかったのに驚いた。導入をしっかりとやることで、子どもたちが自分から行動していた。子どもたちに任せる場面をつくればよいと気づいた。

・大人が問いかけることで、自然がもつ汎用性から子どもたちの発想や見方がたくさん出てきていた。

●当日写真

写真省略

②中村町こども園

●実施日時：2023 年 10 月 19 日（木）9:15～11:30

●対象園/対象児：年中ゆり組（担任：本間先生）28 人

担任 3 名、園長、副園長　　計 33 名

●見学者：保育教諭 5 名　環境学習指導員 1 名

●対応スタッフ：受託 NPO　岩瀬 満・杉山順子・柴崎千賀子

●実施フィールド：中原桔梗公園

●緊急搬送体制：現地でタクシーを呼ぶ

●今回のテーマ 『街中の公園の隠れた素材を見つけ出そう！』

●プログラムの流れ

9:00　【受講者】受付開始@こども園西門

9:15　【受講者・スタッフ】こども園出発⇒桔梗公園へ

9:25　【受講者】研修のオリエンテーション@公園（ゴミ拾いする）

9:20　【園児】こども園出発　持ち物：（子）水筒・たんけんバッグ

9:40　【園児】公園到着

スタート　進行【柴崎】ケヤキの木陰

・スタッフ自己紹介

・今日やること「公園にあるものでピザをつくろう！」

・どんなものが見つかるかな？（五感の話）

・お約束

・先生の関わり方

9:50　ピザの材料を探しに行こう！（範囲：ケヤキより北側）

・葉っぱや木の実、花などをピザの具に見立てる。

⇒色・形・中身・においなどを観察する。

黄色い葉っぱ「チーズみたい！」「形はお星さま」

・具を探しながら、いろいろなものを発見したり遊んだりする。

⇒ダンゴムシ観察、花の汁でマニュキュア、クモの巣観察など

10:25　見つけたものを見せ合おう！（3 つのグループに分かれて）

10:35　まとめの話【柴崎】全員集合@ケヤキの木陰

10:40　おしまい・トイレ　【園児】こども園へ出発

【受講者】休憩

11:00　【受講者】事後振り返り

・実施者より

・質疑応答　など

11:30　【受講者】アンケート記入

11:40　終了⇒こども園に移動・解散

●実施者より

＊担任

・夏野菜⇒運動会のピザごっこという流れの中で、子どもが夢中になれるよいテーマだった。長い時間をかけると自然が見えてきた。これからも子どもと散策したい。

・導入での伝え方が大事だと感じた。子ども自らが動き、つるつるやざらざらを感じ、楽しい表情や真剣な目、いろいろな表れがあった。

＊園長

・子どもたちには観察する力がある。そこに自分たちの知識があるといい。子どものちょっとした動きを拾って一緒に遊ぶこと。大人がどう拾ってあげるか、広げてあげられるか。大人自身も楽しみながら生活したい。

＊副園長

・園内だけではできないことを、専門家とつながることで知識をさらに広げることができる。

＊受託 NPO スタッフ

・子ども一人一人が違う発想をもっていて、友達同士で関わり合う中での遊びが展開していた。正しい知識ではなく、どうひらめくか。「これビーズになりそう」「葉脈から匂ってくる」などの発見もあった。

・子ども自身が集中して見つけていた。「花の色でかけるんだ！」という新しい発見が子どもの目を輝かせ、次の発想につながっていた。

●見学者より

＊保育教諭

・五感の説明がよかった。園に帰って取り入れたい。

・耳をすますことはこれまで意識してこなかったので、やってみたい。

・子どもの発見に対して「宝物だね」という声かけがよかった。園でも拾ったものを大事にしたいが踏んでしまう子もいる。
⇒やってみてわかることもあるので、そこから広がる気づきも大切にしたい。

・自分が知っていれば、やってみよう、こすってみよう、かいでみようとなる。大人がやると子どもの自分でやってみるんだな、と思った。

・保育者自身が、これを採っていいのかどうかわからない。

・採っていいか、拾っていいかは、毒の有無もあるし、道徳的な問題もある。

⇒触らないほうがいいものを覚えておくとよい。有毒動植物の図鑑もある。
子どもには触らない理由を伝え、ルールがあるなら園で共有しておく。
⇒ただ集めるだけではなく、「他の生き物のことも考える」というスタンスで、
大人も子どもと一緒に考えることが大切なのでは。

・1 才児がどんぐりをいっぱい拾ってきた。活かす方法は？
⇒子どもは転がすのが好き。あちらこちらに転がる。種類によっても違うおもしろさ。飛ばすなど、どんぐりの形状を活かした遊びができる。
⇒（他の受講者から）乳児は口に入れてしまうので、圧縮袋に入れてその上に座ったり寝転んだり、体全体で感触を楽しんでいる。

＊環境学習指導員
・普段の園の体験とつながっている内容だった。指導員は園の生活を知るところからプログラムを立ち上げるのがよいと思った。
・広場があると追いかけっこになりがちだが、子どもが自然遊びに集中していた。
・自分が環境教育に深く携わっていた頃と活動の目指すところは大きく変わっている。
・指導員はフィールドにある資源や四季の変化、園でよく行く公園の植物についても研修することができる。

●当日写真

写真省略

③横砂こども園

●実施日時：2023 年 11 月 22 日（水）9:10～12:00

●対象園/対象児：　年少・年中・年長　18 人

担任 5 名　　計 23 名

●受講者：保育教諭 5 名、環境学習指導員 3 名

●対応スタッフ：受託 NPO　岩瀬　満・柴崎千賀子

●実施フィールド：清見潟公園

●緊急搬送体制：園長先生が判断して園へ連絡⇒タクシーで病院搬送

●今回のテーマ　『自然豊かな公園で子どもの好奇心を耕そう！』

●プログラムの流れ：

9:00　【受講者】受付開始@遊戯室　駐車場はこども園

9:10　【受講者】研修のオリエンテーション@遊戯室

9:30　【園児・受講者】こども園出発

9:45　【園児・受講者】公園到着

スタート　進行【柴崎】天気・気温によって日向か日陰

・スタッフ自己紹介

・今日やること「公園の宝さがし」

・五感の紹介（味覚体験はしない）

・お約束

・先生の関わり方

9:50　宝さがしに出発！（水筒は学年ごとひとまとめに置く）

・いろいろな葉っぱ、いろいろな木の実を発見

・どんな遊びができるかよく観察して遊んでみる

・どんぐり転がし、木の実積み、鳥になる、葉っぱの花束、ハンバーガー屋さん

10:40　どんな遊びが楽しかったか紹介（全員集合）

10:45　おしまい・トイレ　【園児・受講者】こども園へ出発

11:00　【受講者】休憩

11:15　【受講者】事後振り返り

・実施者より

・質疑応答　など

11:50　【受講者】アンケート記入

12:00　終了・解散

●実施者より

＊担任

・ものを集めるとよく観る。振ってみると種に気づく。今まで知らなかったことをやってみることで気づいていった。

・チクチクするから触りたがらない子が、枝を持てた。そっと持ってみた。自分なりの発見があったようだ。

・両手に葉っぱを持って鳥になる、という遊びを繰り返しやっていた。今まで集めることはあっても、その場で遊ぶということがあまりなかった。こういう経験が大事だった。

・階段でどんぐりを転がして遊ぶことによって、階段での動きもダイナミックになった。

・色と形に、子どもが気づくまでじっくりと関わることの大切さを味わった。花束にすることで色の違いに気づき、葉っぱを色分けした。そこからハンバーガー屋さんにつながった。

＊園長

・もう少し年齢に合わせて平易な言葉で話してほしかった。

・支援が必要な子も全体の関わりの中で集中できる時間もあった。

・年少にとっては時間が少し長く感じた。

＊受託 NPO スタッフ

・非常に元気のよい子ども達で、広がってしまったが、先生方の手厚いサポートのお陰で自由に思い切り遊ぶことができた。

・計画通りの内容にはならなかったが、子どもたちの自由な動きと発想が活きた。

・スタッフ 2 人がお互いの立ち位置を確認しながら、自分の動きを考えていた。

●見学者より

＊保育共有

・子どもたちと同じようにわくわくした。発想を引き出すかかわり方を見せてもらった。

・フウの実を拾う・集めるところから、高く積む・崩す・また積む、と遊びになっていったのがおもしろかった。

・自然遊びを難しく捉えていた。大きさや色の違いから、いろいろな遊びにつながっていく。子どもたちと一緒に楽しむことが大事だと感じた。

・とても自由に遊んでいた背後に、いろいろな仕掛けが隠れていた。黒い布 1 枚で

子どもの興味がぐんと惹きつけられる。目・耳・鼻などのイラストなど、視覚に訴えわかりやすくしていた。子どもの目線に立つことの大事さを改めて感じた。

＊環境学習指導員

・気負わず、子どもの発見やつぶやきを拾い受け止める。そうすることで子どもに安心感が生まれていた。大人が子ども以上に楽しんでいた。

・子どもと自然と遊ぶことはハードルが高い。そこにあるもので遊びを投げかけ、子どもが乗ってくるまでの難しさを感じた。

・葉っぱを集めていた子が、葉っぱを切ってハンバーガーにして、茎をハンバーガーに刺していた。その工夫に驚いた。

・階段でのどんぐり遊びはどのように始まったのか？

⇒子どもが登ったり下りたりしているところに、ポケットに入っていたドングリを転がしてみた。すると、下にいた子がキャッチしようとした。上から転がす人、下でキャッチする人、の遊びになった。

・あまりに自由過ぎて、どうなるかと思ったが、よく見るとみんな自然物で遊んでいる。自由なのにどうしてそうなるのかと思った。

・雪虫が飛んでいたが、今回は虫を扱わなかったのはなぜか？

⇒雪虫はとてもおもしろい虫。近くにはみんなで遊ぶほどたくさん飛んでいなかったので、特に注目しなかった。

＊こども園課

・園の環境によってやりやすさ、やりにくさはあるかもしれないが、大人のかかわり方や感覚を意識すれば、どの園でもできることではないかと思う。

＊環境共生課

・ぜひ指導員の力を借りてほしい。

●当日写真

写真省略

【受講者アンケート】

●事前アンケート内容と結果：保育教諭（回答数 24）

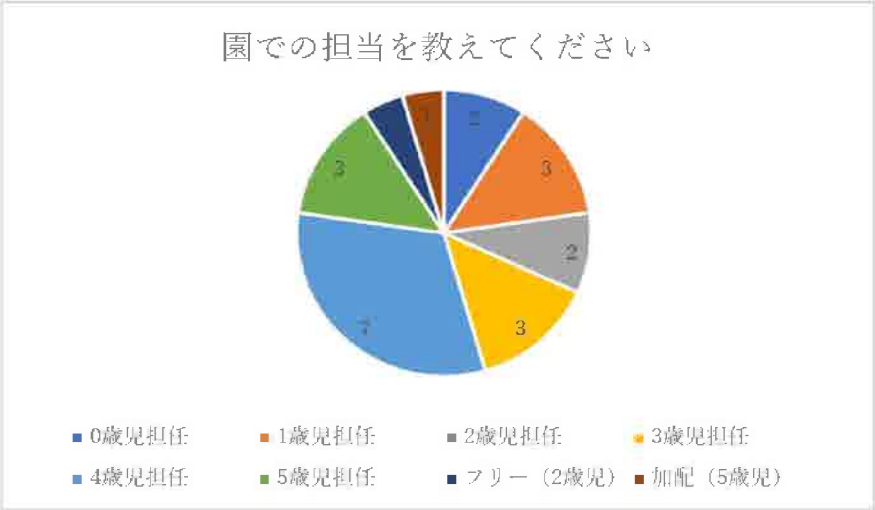
1．あなたのことを教えてください。

① 担当

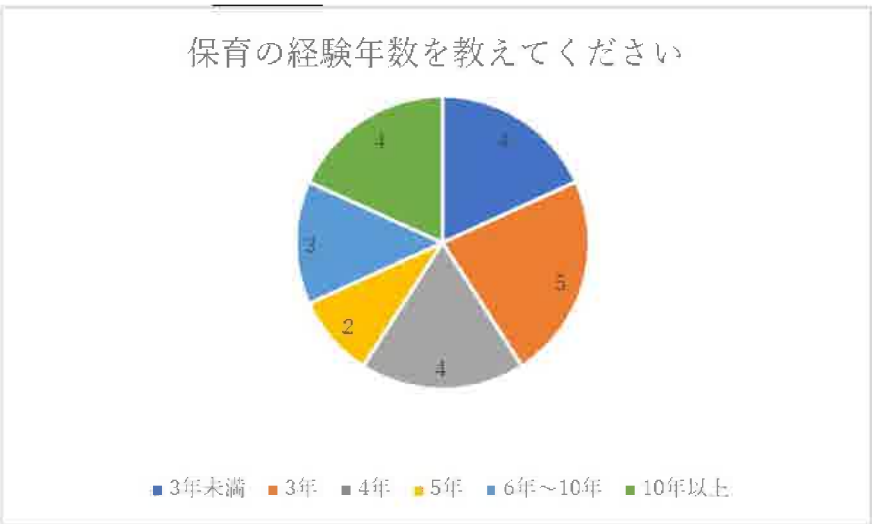
a. 担任 _____才児

b. フリー（主に担当しているのは_____才児）

c. その他（ 園長 副園長 事務局長 主任 ほか_____ ）



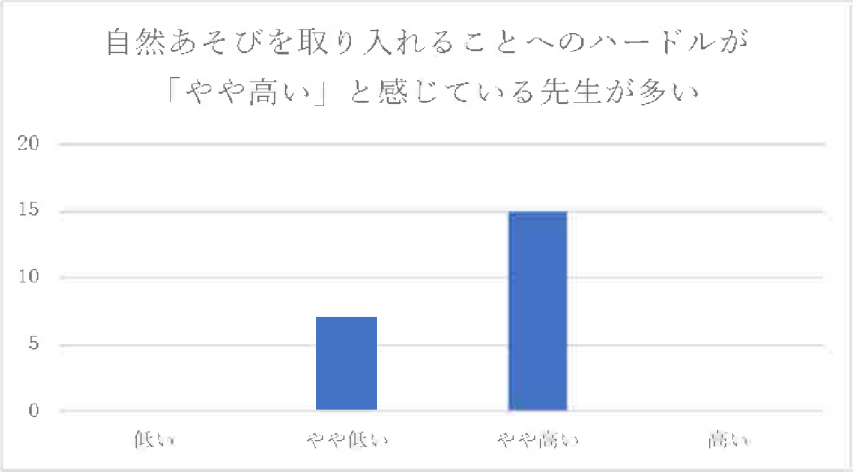
② 保育の経験年数 _____年



2．自然あそびを取り入れることへのハードルの高さはどのくらいですか？

高い 低い

4 3 2 1



3．ハードルがあるとすれば、それは何だと感じていますか？

よく出たワードから

「危険」「知識がない」「取り入れられない」「つながらない」

「活かせない」

※詳細は別添えのアンケート結果集計

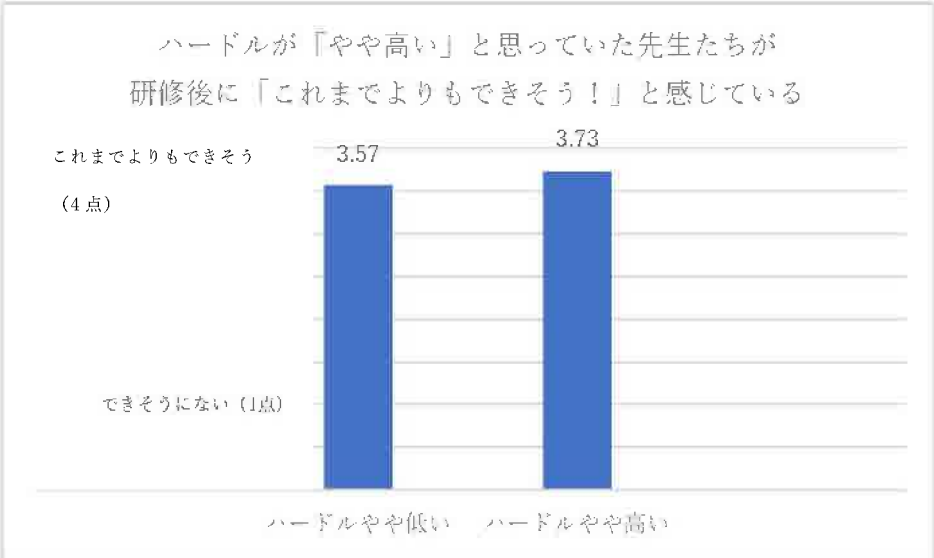
●事後アンケート内容：保育教諭（回答数 24）

研修を受けて、

1．今後、自然あそびをどの程度できそうだと思いましたか？

これまでよりもできそう　　できそうにない

4　3　2　1



2．心に残ったことを自由に書いてください。

①アイディアなど

よいアイディアに含まれていたワード

「おもしろい」「気づく」「見つける」「つながる」「五感」「～しやすい」「見やすい、見せやすい」「作りやすい」

（以下、抜粋）

・見つけた自然をテントにピンチ+ひもで飾る、見つけるだけでなくそれを見立てる、ピクニックやお弁当など子どもがわくわくするようなアイディア

・大人が雑草と思ってしまうもの（なんでもないもの）が、子どもにとっては宝物になる

・五感カード　遊びのはじめと終わりに五感カードを見せることで、子どもたちも意識をして触ったり匂いをかいだりして植物に触れることを楽しんでいた。

・「お弁当づくりというテーマ」子どもたちもイメージしやすいし、いろんなものを入れて OK だから作りやすい

・テントに麻ひもで自然物を吊るす→オブジェになり「見て」楽しむ　花をむく、バラバラにして見立てる→白い部分を集め、米にするなど。フウセンカズラをむく前に感触を楽しむ

・遊びの流れの一つとして取り入れる、紙に自然物で色がつくあそび、破ったりもんだりしてにおいをかぐ

・葉や木の実を紙にこすってみたり、帽子につけてみたり等、ただお散歩バッグにいれるだけでなく、もう一つアクションしているところ

・普段の遊びから「ピザの材料を探そう」という取り組みが、子どもたちのあそびへの導入としてとてもスムーズだった。

・紙をもっていくことで、そのうえでじっくり見たり、色をつけたりと、新たな発見ができること。「一つください」など、自然物を大事にする姿勢。

・紙・板…その場で遊びにつながるものを用意すると、子どもたちの「やってみたい」「もっと」につながる

・いつもの遊びにプラスアルファしていくヒントは、何よりも子どもの気づきやあそびの中にある

・今日はこんなことを体験させたいな、こんな視点を大切にしようと保育者がポイントを押さえて準備をしておくこと

・葉っぱや木の実などを使ってなりきりあそび（うさぎや鳥など）。公園の階段を使っての木の実転がし。木の実積み。自然物の見立て遊び。

・五感を使うということを意識することで、子どもたちも大人も様々な気づきがあり、その気づきから遊びも発展する

・ただの鬼ごっこでも、葉っぱを使って羽に見立てて鳥になって逃げたり、木に触っている間はセーフ！など、使い方ができる。
・子どもたちの見つけたものを集めた場所が拠点になっていた。
・フウの実を使って転がし競争、チクチク屋さん、山のように積んでみる、子どものアイデアから遊びをどんどん広げていった。
・子どもたちが思いっきり楽しんでいる姿が印象的で、考えたり試したりしなが遊んでいてよかった
・視覚支援…目・鼻・耳・手、五感を使って楽しめる。黒い布…見やすい、興味を持てる→いっぱいひろってみたいな。実を投げる、転がす、積んでみる→友達と一緒に…。葉を帽子につけてみる。形、色、重さ、数のちがい→お店屋さんごっこに…

②子どもへの関わり方など

よい関わりに含まれていたもの

「感じる」「受け止める」「見せる」「共感」「認める」「～しやすい」

（以下、抜粋）
・子どもたちの全てを受け止めこたえていた
・どんなにおいがするか、どんな色か、振るとどんな音がするか、等、子どもたちに問いかけて気づきにつなげている。
・子どもたちの発見ひとつひとつをひろって、一緒に楽しむ。
・子どもが気づいてから発信していく、子どもたちが自分で気づくことが大切
・「みてみて」のあとに子どもからの発信を待つ姿、共感・共有+見せ合う機会を作っていた
・「知らなかった」「いいのみつけたね」認めて、自由な遊びをのばしていく
・さっきは○○言ってたね、さっきのはどうだった？と比較するような声掛けをすることで、振り返ったり比較して発見したりという姿に繋がっていた。
・実際に拾って匂いをかいだり、触れたりすることで、子どもたちのイメージをしやすくする
・「前はどうだった？」「それとはどう違う？」と、子どもたちが考えることができるような質問を投げかけていた
・五感で感じられるような言葉がけ「どんなにおい？」「何が見えるかな？」「さわったらどんな感じ？」　「みてー！○○みたいじゃない？」
・「どんな感じ？」「なにみたい？」と子どもの発見を引き出している
・子どもが見つけたものに対して「どんな匂いがするかな？」「ほんとに？」など、同じことをしてみたり、子どもの思いに共感しながら遊んでいた

・大人が楽しむ・やってみる姿をみて、子どもたちは自然と真似をしてみたりやってみたいという姿につながる
・大人に知識はあっても教えるのではなく、「なんだろう？」「どうしてかな？」と子どもが考えるきっかけになる声掛け
・感じたこと気づいたことを素直に言葉にしていく。
・子どものマイナスな思い・つぶやきも、プラスに変える言葉がけをすること

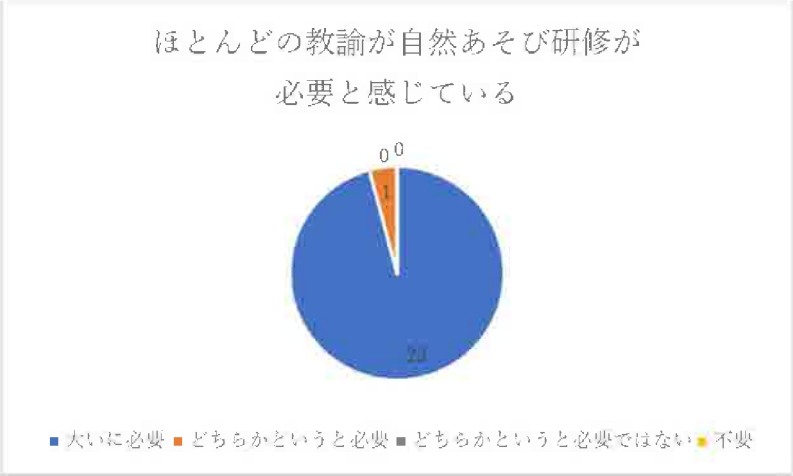
3．その他、感想などありましたらお願いします。
（以下、抜粋）
・乳児にどう取り入れれば良いかな？と考え悩んでいましたが、今日たくさんの発見を吸収することができました。
・いつもの園庭が、魅力あふれる園庭に見えるんだろうなと思いました。自園の園庭を隅々まで見て、子どもたちと自然を見つけて「おもしろい」につなげていきたいと思います。
・保育者が意図的に整えていた環境だけでなく、意識していなかったけど身近な汎用性のある自然物に目を向けていくことができ、今後の保育でも取り入れていくことが出来そうだと思いました。
・様々な見方をすることで、自然に遊びが広がると言うように感じた。自然物を遊ぶ中で特徴を捉えていくことで、見立て遊びが楽しくなっていくのだと思う。人によって正解が一つではないからこそおもしろい五感を使える自然物を取り入れていきたい。
・自然ってこうやって遊ぶって決まってないから良い、と言う言葉を聞いて、だからこそ、子どもの気づきもたくさん出てくるんだなと思いました。今まで身近にあった自然をもっと活用していきたいと思いました。
・子どもの想像力・発想力っておもしろいなと改めて感じました。それを引き出す「自然」「先生がたの言葉がけ」参考にしたいです。
・声掛けや導入の仕方でここまで長時間自然をじっくり観察し、五感で味わうことを楽しめることがわかりました。自然あそびのおもしろさを自園の子ども・職員みんなで感じていきたいと思います。
・明日から実践できるような取り組みやかかわり方を学ぶことができ、もっと自分の引き出しを増やしていきたいと感じました。
・身近な自然でこんなにいろいろな発見ができることにおどろきました。まずは、自分が自然に関わる姿を子どもに見せていきたいと思います。
・なぜ自然が必要なのかがわかり、子どもたちの生きていく力を育んだり、土台にしたりするために取り入れていきたいと思いました。

・自然が少ない園もありますが、探してみるとひとつの自然物からこれだけの遊びがひろがっていくことがわかりました。自然について自分でも学びながら子どもたちに伝えていきたい、一緒に遊んでいきたいと思います。

4．このような自然遊びの研修の必要性はどの程度感じますか？

おおいに必要　　必要ではない

4　　3　　2　　1



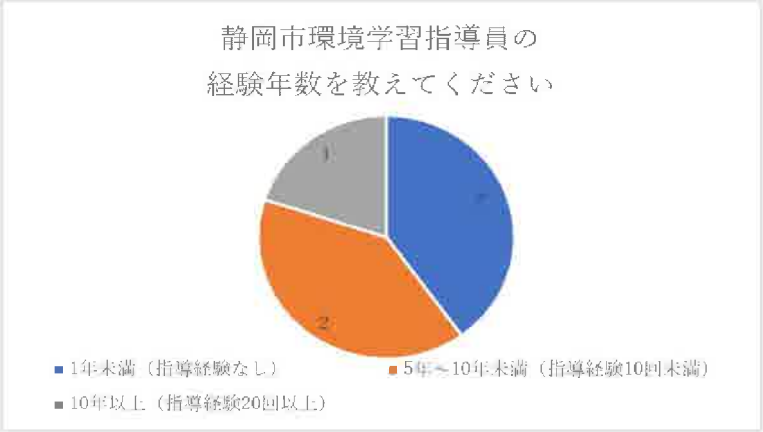
●事前アンケート内容と結果：静岡市環境学習指導員（回答数 5）

1．あなたのことを教えてください。

① 静岡市環境学習指導員　経験年数＿＿＿＿年

② 指導員として、こども園など幼児を対象とした対応の経験はありますか？

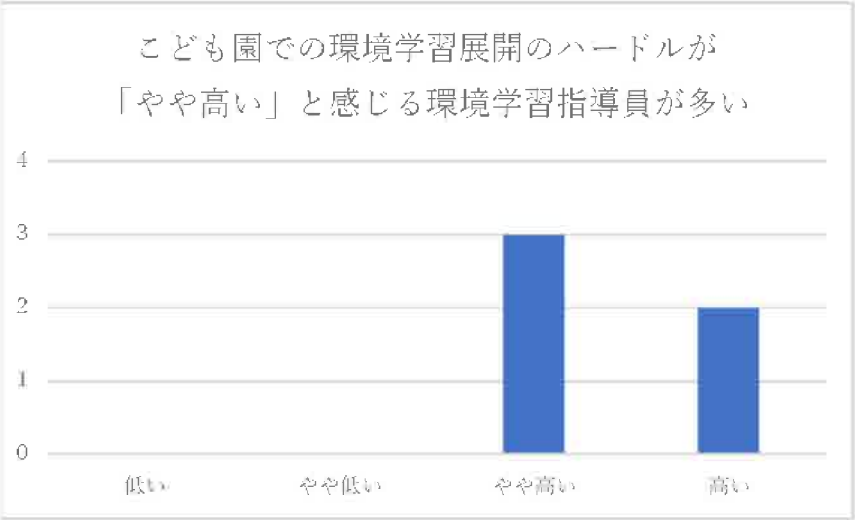
a. ない　　b. ある　→　約　　回



2．こども園などで自然遊びを通じた環境学習を展開することへのハードルの高さはどのくらいですか？（単なる自然遊びの紹介ではありません）

高い　　低い

4　3　2　1



3．ハードルがあるとすれば、それは何だと感じていますか？

よく出たワードから

「危険」「知識がない」「子どもの反応にどう対応していいかわからない」

※詳細は別添えのアンケート結果集計

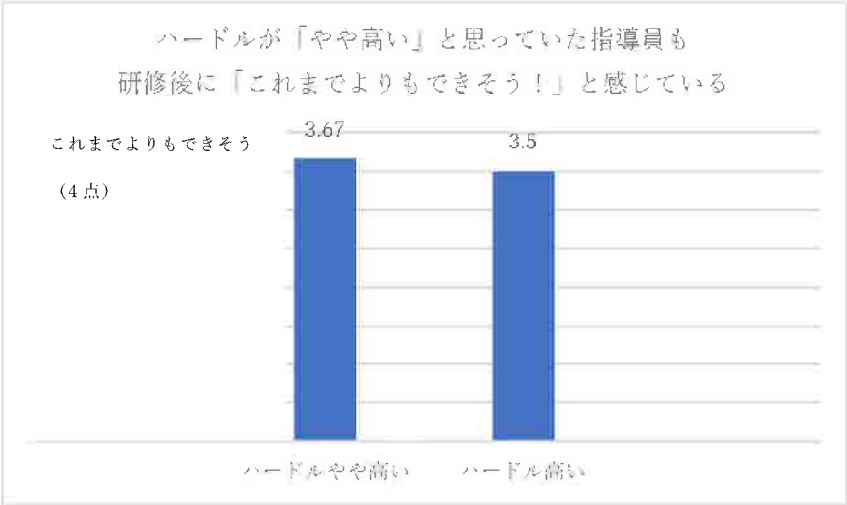
●事後アンケート内容：静岡市環境学習指導員（回答数５）

研修を受けて、

1．今後、自然あそびをどの程度できそうだと思いましたか？

これまでよりもできそう　　できそうにない

4　3　2　1



2．心に残ったことを自由に書いてください。

①アイディアなど

よいアイディアに含まれていたワード

「集める」「見つける」「～しやすい」

その他、具体的な自然物やツールの名前

（以下、抜粋）

・ひもとせんたくばさみで作る飾りはシンプルだけれど、子どもの目をひく飾りだと思いました。

・花や草の匂いと、子どもたちが自発的にできていることで、「におい」や「触感」に特化しても。

・葉っぱでハンバーガー

・黒い布、植木屋さんの足下の末、フウの実の様々な遊び方、ハンバーグ屋さんなど、子どもたちの心に響くモノがたくさんありました。

・黒い布の上に広げるのは小さいものなど見えやすくてよかった。個々で集めるだけではなく、一カ所に集めること。お店屋さんを開くこと。

②子どもへの関わり方など

よい関わりに含まれていたもの

「一緒に遊ぶ」「待つ」「振り返る」

（以下、抜粋）

・共に自然を楽しむかかわり方が、力が入らず、取り組みやすくて良いなと思いました。大人から教えるのではなく気づくのを待つスタンスが良いと思いました。

・これまでの園の活動を活かしていたのが、とても良かった。

・階段で遊んでいる子たちが NPO スタッフの参加によって、自然あそびになっていきました。その過程はとても自然でしたが、振り返りで、NPO スタッフがどういうねらいでそこへ入っていったかをお聞き出来てよかったです。「一緒に遊ぶ」大事なことを教わりました。

3．その他、感想などありましたらお願いします。

（以下、抜粋）

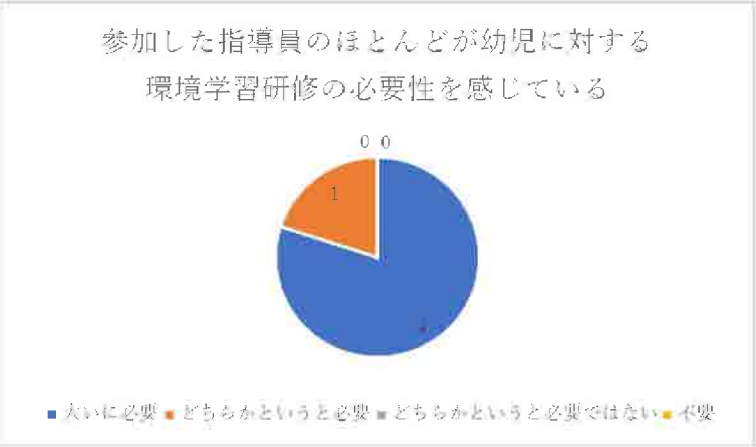
・これまでに、非日常の中での環境学習が多かったので、日常の延長としての環境学習ができるのはとても良い。

・「いっしょに遊ぶ」とはこういうことだと思いました。お二人が、一番楽しそうに遊んでいらっしゃいました。これが一番大切なんですね。

4．このような自然遊びの研修の必要性はどの程度感じますか？

おおいに必要　　必要ではない

4　3　2　1



●アンケートの結果分析（常葉大学短期学部教授：遠藤知里先生）

＊保育者の場合、研修前には「ややハードルが高い」と思っていた人も、研修後には「これまでよりもできそう」とほとんどの人が感じている（４点満点で、平均点が 3.73 点）。研修を通して、新たなアイデアや子どもへの関わり方のヒントを得て、その結果ハードルが下がった（これまでよりもできそうだと思えるようになった）のではないか。

＊自由記述を個別にみると、「こういうふうにやれば良いんだ」という気づきが多く得られたことがわかる。「子ども自身がおもしろさに気づいている姿」をキャッチして一緒に楽しむことで、あそびがつながり発展していく様子を目の当たりにして、事前アンケートに書かれたハードル（たとえば「危険性」とか「知識がない」とか「引き出しがない」）はスルーしても全く問題にならないことに気づいたのではないか。また、モデルプログラム指導者（NPO スタッフ達）の言葉がけやかかわりの意図、それに応答する子どもたちが体験の中で味わっている内容は、保育者が見れば容易に理解できるものであり自分自身の保育の中に取り入れていくイメージを具体的に持つことができたのではないか。

＊自由記述から、保育者はモデルプログラムを通して「子どもからはじまる自然な流れ・つながり・展開」に着目していたことが感じられた。子どもの気づきを丁寧にとらえて応答していく（一緒に楽しむ）というシンプルなことが、遊びの展開が自然に生じるための重要な技術であることが確認されたといえる。

＊環境学習指導員も同様に、研修前には「ややハードルが高い」と思っていた人も、研修後には「これまでよりもできそう」と感じている（４点満点で、やや高いと思っていた

人は平均点が 3.67 点、高いと思っていた人は 3.5 点と共に上がっている）。研修を通して、新たなアイデアや子どもへの関わり方のヒントを得て、その結果ハードルが下がった（これまでよりもできそうだと思えるようになった）のではないか。

＊環境学習指導員には「環境学習」という使命があり、幼児に対する対応の難しさがハードルになっているようであるが、モデルプログラムを見ることで、まずは子どもの目線で一緒に発見したり遊んだりする姿勢の大切さに気づいている。ハードルが下がったと同時に、幼児ならではの日常とのつながりや環境への視点へのアプローチなどの難しさを感じたことがうかがえる。

＊保育者、指導員ともに、「これまでもできそう」と感じながらも、ほとんどの人が「このような自然遊びの研修が大いに必要」と答えている。今後のさらなる保育技術の向上や環境改善などへの課題、知識や対応力の向上の必要性から継続的な研鑽の場の確保を望んでいると考えられる。

（２）こども園園長会での普及啓発

8/7（月）13:00～13:15 と 14:00～14:15 の 2 回実施（オンライン）

・本事業の説明

・モデルプログラムへの協力、見学者募集の案内

・昨年度制作した動画視聴が叶わなかったため、1 回目では口頭で説明、2 回目は安倍口こども園園長より感想を伺った。動画のチラシを紹介して動画視聴の PR も行った。

5　役割分担

業務遂行にあたっては、仕様書別紙のとおりの役割分担で行った。